

池井戸 潤 が見る 釜石の現在

数々の名作を世に送り出している作家の池井戸潤さんが、工場をテーマにした新聞連載の取材で釜石を訪れ、震災から再興した会社や震災後に建てられた施設などを視察しました。

震災から10年が経過し、復興への歩みを進めてきた私たちのまち。池井戸さんの目に映る釜石から、改めて釜石の魅力を探ります。



撮影 猪又 敬大

釜石にUターンし、市の広報を担うことになった私は「釜石の魅力ってなんだろう」こんな風に考える時がたまにある。いつも良い答えは出ない。ただ、今回の取材を通して、その答えに少し近づいた気がする。

「工場は、生き物みたいで中身がある。ひとの人生をのぞくような面白さがあるよね」工場の良さを池井戸さんはこう語る。訪ねたのは、いずれも水産加工業を営む3社で、そのうちの1社はレストランも経営している。商品の品質もさることながら、この3社に共通していたのは「ファンを大切にする」ということ。消費者から届く生の声や接客をはじめとした印象を大事にしていた。池井戸さんが感じた3社の印象は「首都圏の会社と比較しても、ターゲットが明確で素晴らしい経営者。着眼点が優れていると思う」涙を浮かべながら再興までのエピソードを話す経営者の目を見て、うなずきながら耳を傾ける姿が印象的だった。

池井戸さんは、社会人ラグビーをテーマにした作品『ノーサイド』

ゲーム』も手掛けている。そんな池井戸さんが感じる釜石ラグビーとスタジアムの印象は「ラグビー場がかなり多い！こんなにラグビー場があるところは見たことないな。そのくらいラグビーが身近にあるまちなんだって印象。スタジアムは、そうだな。ゴルフ場と言うと、セントアンドリュース（英国にあるゴルフ場の聖地）みたいな感じ。自然と一体になっていて、聖地のようなスタジアムだね。海も山も川も近くて。それと、普通スタジアムって閉じられた環境が多いけど、ここはオープンでしょ。こんな環境はここしかないよね」釜石の魅力を外から来た人が語る。これは、なんとも嬉しいものだ。

釜石に来るのは初めてだったが、新日鉄釜石の知名度もあり、子どもの頃から釜石のことは知っていたという池井戸さん。「釜石の皆さんは、自分たちが有名だってことをあまり知らない。宣伝してないのに名前を知られているのはすごいこと。気が付いていないだけで、引き出しはいっぱいあるはず」

——長くつらかった10年。同時に多くのものを得た10年でもあった。震災がきっかけでつながりが生まれ、多くの人が釜石のファンになった。そう思ってくれるのも、釜石に何らかの魅力を感じているからに違いない。そうした人が釜石のファンであ

り続け、また新たなファンを増やすためには、釜石にいる我々がもっと釜石を好きになることから始めるのはどうだろう。まちの未来は、私たち一人一人にかかっている。釜石の魅力はきっと身近なところに転がっている。

（文・市広聴広報課 猪又敬大）

